

## 通信制大学院生の現状と今後の課題

宇 野 絹 子

### 〔抄 録〕

近年、生涯学習に対する社会人のニーズが高まっている。またここ十数年の間に、大学の開放は飛躍的に広がり、社会に開かれた大学へと大きく変化し、社会人を対象とする大学院が増加している。

その形態は様々であるが、今回は通信制大学院に焦点をあて、通信制で学ぶ大学院生への面接調査結果を分析することにより、通信制大学院の課題と発展への道を考察していきたい。特に通信制において、ドロップアウトすることなく修了に至るためのピアサポートの大きな効果についても実証していきたい。

ユネスコに端を発した生涯教育のひとつの側面である「学び続ける社会」での社会人大学院の存在価値は、通信制がいかにあるべきかを考えることから未来への展望が開けるのではないかと考える。

キーワード 社会人大学院、通信制大学院、サポート体制、ピアサポート

### はじめに 通信制大学院生の現状と今後の課題

近年、社会人を対象とする大学院が増加している。その大学院は、今や有職者や年配の人が、それぞれに学ぶ目的を持ち、夜間や週末や通信制などの大学院の多様な制度の中で、「学び」への欲求を実現できる時代になった。

本論では、社会人大学院生増加の社会的背景を考察しつつ、文部科学省の大学院制度改革をまとめるとともに、今回は通信制大学院に焦点をあて、通信制で学ぶ大学院生への意識調査を分析することにより、通信制大学院の課題と発展への道を考察する。

### I 社会人大学院生の増加と社会的背景

#### 1 社会人大学院生とは

「社会人大学院生」という言葉は、学術用語でもなければ法律で規定された用語でもない。「文部科学省学校基本調査」<sup>(1)</sup>における大学院学生数の分類では、社会人とは「職についている

者ただし、企業等を退職した者及び主婦を含む」としている。

また山田礼子も「社会人という呼び方は欧米にはない日本独特のもの。成人学生には現職の職業人、高齢者、主婦など包括的に含まれ、非伝統的學生と呼ばれることはあっても、社会人という呼ばれ方は定着していない。」<sup>(2)</sup>と述べている。こうしてみると、「社会人学生」という言葉は日本独特の言葉であるといえる。

大学院設置基準の改正や一連の答申等の生涯教育への取り組みから考えると、山田礼子が述べている「一連の政策的、制度的進展の中で、職業人、主婦、定年退職者を含む成人学生を社会人学生と呼称することが定着した。」<sup>(3)</sup>とする記述が社会人学生を包括的に捉えていると考えられる。本論ではこの定義をもって論を進める。

社会人大学院生増加の要因として、社会変動や技術革新に対応するため①リフレッシュ・リカレント教育への期待②社内研修から自己啓発支援へ③高度職業人養成に特化した専門職大学院など、社会的ニーズの高まりなどがある。また、④企業における年功序列制から能力主義への移行とも関連している。さらに⑤わが国の18歳人口の減少に対応する大学の経営戦略などの理由が考えられる。

2006（平成18）年度の文部科学省の学校基本調査によると、全大学院生261,049人に占める社会人大学院生は48,609人で18.6%を占めている。また統計要覧によると、平成18年度通信制大学院は放送大学を始めとして23校あり、学生数は約10,000人となっている。

## 2 大学院の制度整備

わが国における社会人の大学院受け入れ及び通信制大学院の制度の変遷を、文部科学省を中心とする大学院改革を中心にみていくことにする

### ・1974年 大学院設置基準の改正

修士課程に社会人を対象とした昼夜開講制や夜間にも授業のできる夜間大学院の制度が整備された。この後、文教政策は、生涯学習体系構築の方向に進められていく。

### ・1989年 大学院設置基準の改正

夜間大学院の制度整備（夜間と土曜日の午後だけで修士課程を修了できるという大学院）  
修士課程に昼夜開講制

### ・1991年 大学審答申「大学院の量的整備について」

平成12（2000）年までに現在の規模（1991年度・修士・博士合わせて約10万人）の2倍程度に拡大することが必要であるとされた。

### ・1993年 大学院設置基準の改正

博士課程に昼夜開講制、大学院にも科目履修制度を導入

### ・1998年 大学審答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」

通信制大学院に修士課程のみ認可

・2000年 専門大学院の開設～2003年専門職大学院開設へ

2000年には既存の大学院修士課程に高度職業人養成課程である専門大学院が設置されることとなった。しかし、その後は専門職大学院へと移行していく。専門職大学院は、2003年に開設され、「経営」「マネジメント」などの専攻がある。また、司法制度改革の一環ともからみ、2004年「法科大学院」も登場した。

・2002年2月 中教審答申「大学などの社会人受け入れの推進方策について」が発表された。

主な内容は、a. 通信制博士課程の制度化 b. 専門大学院1年制コースの制度化 c. 修業年限を超えて履修し学位等を取得する仕組み（長期履修学生）制度の導入などである。

・2005年6月 中教審 「新時代の大学院教育」中間報告が発表された。

通信制大学院については、この制度が平成10年に創設され、平成17年には19校、18年には23校と増加している。大学院学生数でみると、1988（昭和63）年87,476人だったものが、2006（平成18）年には、261,049人と飛躍的な増となり拡大発展している。

・2007年4月 教職大学院設立に関する省令等が施行される。専門職大学院の修了者には、「教職修士」（専門職）の学位を与えることとなっている。今の「専修免許状」と同等のものとなる予定である。2008年4月開校予定である。

以上からわかるとおり、生涯学習体系への移行及び大学院の量的整備が進展している。社会から寄せられる大学院への期待、そして、そうしたニーズに応えるための新たな姿を模索している大学院、双方の思いにより社会人大学院が発展し、新しい教育のあり方を生み出し、さらにめまぐるしく変化し続けている。

授業形態も従来型のほかに、昼夜開講制や夜間にも授業のできる夜間大学院の開設、また、1989年には夜間と土曜の午後だけで修士を修了できる夜間大学院の設置が認められた。1993年には、博士課程にも昼夜開講制や夜間大学院が認可された。さらに1998年には、修士課程に通信制大学院が認可され、2002年には博士課程も認可されている。

また、サテライトキャンパスやインターネット大学院など、あらゆる学生が地理的、時間的制約をこえて通学制の大学院の授業に参加できる時代になっている。

さらに、バーチャルユニバーシティが、東大大学院・信州大学・東北大学などで実施されており、職業等を持って学習を希望する人々の様々な学習需要に対応するため、様々な制度の改革がなされている。

## Ⅱ 社会人大学院生への学ぶ目的・動機等の意識調査

### 1 通信制大学院の現況

通信教育課程は授業の形態が違っただけで、通学の学生と同じように評価基準があり、修了要

件の単位数も同じである。大学院設置基準第16条に定められている30単位以上を修得する必要がある。

通信制の大学院の授業方法については、設置基準の規定により大学の通信教育の場合と同様「印刷教材等による授業」「放送授業」「面接授業等」を適切に組み合わせることにより、当該専攻分野の教育を効果的に実施する必要があるとされている。

また、履修形態には様々なものがある。放送大学の放送授業を始めとして、東亜大学、中京大学等の大学院ではインターネットを利用したブロードバンド放送による履修方法やインターネットの双方向スクーリング、また聖徳大学や名古屋学院の大学院にサテライトキャンパスでのスクーリングなどがある。今後さらにマルチメディア技術の進展やインターネットの普及が拡大し、各大学院においても最先端技術の活用が進むものと考えられる。

現在、通信制で行われている「面接授業」にも、直接対面して行うスクーリングや面接などの従来型の授業形態のほかに、「遠隔授業」が取り入れられているところがあるが、今後、それぞれの方法のもつ教育効果のメリット・デメリットを検証しながら、各大学院が積極的にそれらを活用していくことが期待されている。

## 2 意識調査の概要

### （1）面接対象者及び調査方法

本調査の目的は、大都市の文科系通信制A大学院教育学研究科（以下「A大学院」という）で学ぶ学生に対して、学ぶ目的、動機等を調査し、また同学生が抱える悩みや課題をききとることで、今後の社会人大学院のありかたを探り、また「A大学院」の実態をまとめるとともに、今後の課題について考察することを目的とする。調査概要は以下のとおりである。

①調査方法 基本項目を対面により質問紙に沿って回答を得、あわせて全員から追加調査の協力の了承を取り、随時にメール・電話・郵便により調査を行う。

②調査対象 「A大学院」B専攻 平成13年度入学生9名（入学時10名、1名が早期に退学しているため9名）

③調査期間 9名のうち8名については、平成17（2005）年2月11・12日の広島への研修旅行期間中に実施。不参加の残り1名については郵便により調査を行った。補足的には「同期生通信」（平成13年4月号～平成14年6月号 計13回）の記名原稿も分析に使用した。調査対象者の属性は（表1）のとおりである。住所地は東北から中国地方の7府県である。

### （2）内容及び分析結果

質問を行った内容は次の9項目である。

- ①大学院への入学の動機、目的 ②大学院で学んだことの自分の将来への影響 ③大学院修了後の進路（予定） ④大学院で研究を進めるうえでの課題 ⑤大学院について望むこと ⑥社会人大学院生を続けていくうえで励みになること ⑦社会人学生としてあなたの

表1 調査対象者

(17. 2. 11調査日現在)

名前	年齢(歳)	性別	職業
A	50代	女	公務員
B	40代	女	教員・中学校
C	50代	女	教員・中学校
D	40代	男	公務員(教育職)
E	60代	男	企業定年退職
F	30代	女	看護職
G	50代	女	教員・小学校
H	60代	男	教育職定年退職
I	40代	男	教員・高校

所属する会社・団体等に望むこと ⑧大学院を修了することによる勤務先や社会での評価  
の変化の可能性 ⑨生涯学習社会にあって、社会人大学院のあり方

まず①②③の項目について、AからIについて聞き取りを行い、まとめた内容を表2のとおり作成した。

表2 入学の動機・目的によるタイプ分類

	氏名	入学の動機・目的	学んだ成果は何か	修了後の目標	修了状況
資格型	I	・論文をまとめるという長年の目的達成のため(結果として専修免許)	・自信につながった	・仕事に活かす	H15.3 修了
	F	・卒論を充実させるため(結果として院卒は副校長資格)	・看護学校で働くこと、看護教育の中で十分役に立っている	・博士課程に進学希望	H17.3 修了
	D	・専門性を高める(教育職のため)(結果として専修免許)	・多いに役立った ・論理的に物事を考えられるようになった	・仕事に活かす	H17.3 修了
研究型	B	・内地留学の選考基準の不明確さに触れ、自分の力のみで入学しようと思った	・自分としては役に立っているが、他人までの影響力は持ち合わせていない	・放送大学での履修	H17.3 修了
	G	・今までの振り返り教育を多角的に研究しまとめたいと思った	・子どもの見方、研究の仕方、文献の読み方などを学ぶことができた	・通信制博士課程に進学希望	H17.4 再入学
	C	・研究したいテーマがあった	・将来の学びの生活に入るためには生涯教育は私の将来を言い当てている	・博士課程に進学希望	H17.4 再入学
総括型	H	・今までの仕事を総括	・現役時代の学校教育や社会教育を振りかえり総括することができた ・教育現場にモラルバックボーンとしての宗教性の大切さ	・地域で聞き取り調査など ・生涯学習の援助	H17.3 修了
	E	・老後の生きがい ・教育コンサルタントに活かす	・役立っている	・社会教育ボランティア	H17.4 再入学
教養型	A	・仕事の課題の解決 ・現状に飽き足らなくて	・長い目で見た時、考え方の幅や分析の仕方など分かったことが有益	・NPO法人での生涯学習の支援	H17.4 再入学 H18.3 修了

①資格型は、専修免許状の取得や修士修了資格をめざすタイプ、②研究型は研究したいテーマを持っていたり、多角的に研究しようとするタイプ、③総括型は定年退職を迎え、今までの仕事や人生を総括しようとするタイプ、④教養型は資格取得や研究目的でもなく幅広い知識を得たいと考えるタイプである。

今回の調査によると別表のとおり、9名中、資格型：3名、研究型：3名、総括型：2名、教養型：1名となった。

資格型は30代40代の人で、大学院修了（15.3修了・17.3修了）により結果として、専修免許を取得し主幹教諭となり、また看護職では看護学校の副校長資格を取得している。研究型は、30代から50代にわたっており、テーマを持って研究したいと考える人達である。また、総括型は、60代で現役を定年した人が生涯の仕事を総括し、老後の生きがいを追求し系統的に学ぼうとする人である。これは西岡のいう「教育者としての高齢者」<sup>(4)</sup>の側面を具現している。教養型は、物事を多面的に捉える力を養い現状を改革し教養を深めることを目的としている。現在の仕事に活かすのはもちろんであるが、多面的な教養を志向している。本調査における学ぶ目的・動機の分析は以上のとおりであった。

社会人大学院生は大学院で新しい知識や技能・分析能力やものの見方などを身に付け、世の中でそれを役立てようとしていることがわかる。社会人であることで制約の多い、決して平坦とはいえない学業生活のなかで、獲得した知識や新たな視点のもとに、自分の生活を切り拓き、あるいは深めて行こうとしている。

社会人が学ぼうという意欲は、安定のなかからは生まれてこないものであろう。大学院をめざす多くの人は、仕事や自分自身の生き方などでさらなる目標があり、それへの飛躍を期待して学びの場に戻って来ているといえる。それだけ学びに対するモチベーションは高い。

このようにしてみると、大学側にとっても、社会人大学院生からの様々な目的に対応するためのカリキュラムの検討が求められているといえるであろう。これからは各大学院がもつ個別の特色に応じたカリキュラムの検討がなされていくべきだと考える。

次に、④研究をすすめるうえでの課題、⑤大学院に求めること、⑥学習を進めるうえで励みになることについて得た回答は別表のとおりである。(表3参照)

ここでは前述の資格型、研究型、総括型、教養型のタイプ分類や年代等による顕著な傾向は見られず、目的・動機・年代等のプロフィールの違いはあっても同じ大学院・同専攻で学ぶ者としての共有できる課題や大学院への要望であることが分かる。

はじめに、④研究を進めていくうえでの課題について、みていく。ここでは⑦所属する会社・団体に望むことで得た回答も含めて、本人に関することと職場に関することの二項目に分けて考察する。(表4参照)

本人に関することでは30～60代ということで、特に壮年以降では個人差があるとはいえ、仕事と学業をこなすには、体力的に無理が利かない年代となり、若い時のような根気が続かない

表3 研究を進めるうえでの課題及び励みになること

タイプ	氏名	研究を進めるうえでの課題	大学院に求めること	励みになること
資格型	I	・職場の理解と協力	・スクーリングの増や大学間の単位互換 ・学生へのIT技術の推進	・同じ目的で学んでいる仲間の支え ・強い目的意識
	F	・文献を読みこなすこと	・スクーリングを増やしてほしい ・教員とのやり取りをメールでしたい	・同期生との連絡や助け合い
	D	・仕事との両立 時間の確保 ・若い時の根気が続かない	・エクステンションセンター開設 ・eラーニングの推進・スクーリングの増	・勉強を続けているという自信
研究型	B	・仲間や大学との連帯感をどうもつか	・仲間や大学との連帯感 ・学びやすい環境整備	・共に学びあう仲間の存在
	G	・仕事量が多く時間の確保が困難	・教員や院生との情報交換	・教員や院生との出会いや情報交換 ・院生同士のメールや手紙のやり取り
	C	・仕事との両立 時間の確保 ・同じ志を持つ人との交流の必要性	・多くの人に学ぶ機会を ・休日夜間など年間通じて受講したい ・日常の学習の支援体制	・同じように学んでいる仲間との交流
総括型	H	・田舎住まいのため文献の入手が困難	・修了後も安価に聴講できるとよい ・宗教性を活かした教科内容を増やす ・通信制博士課程の開設	・同期生とのネットワーク
	E	・通信制のため自分だけの研究の難しさ	・通信制のさらなる発展	・同期生との交流や仲間との接触
教養型	A	・年齢的（仕事の比重・健康面）な困難の種がある	・修了にむけてのサポート体制	・同期生との交流や情報交換により孤独から解放される

表4 大学院で研究を進めていくうえでの課題

		研究を進めていくうえでの課題
本人に関すること	年 齢	・体の無理が利かない ・若いときの根気が続かない
	時 間	・仕事が忙しく研究時間の確保が難しい
	距 離	・田舎住まいのため文献入手が困難
	精神面	・モチベーション維持のため仲間や大学との連帯感をどうもつか ・同じ志を持つ人との交流の必要性
	学業面	・研究計画をしっかりと立てること ・通信制のため自分だけで研究を行うことの難しさ ・文献を読みこなすこと
職場に関すること	仕事の量	・仕事が忙しく研究時間の確保が難しい
	転 勤	・在学中の転勤の配慮がほしい
	学びやすい環境整備	・勤務形態を工夫し、学びやすい環境をつくってほしい ・スクーリング時の特別休暇を認めてほしい ・平日に講義に出席する際の配慮がほしい ・多くの人に学ぶ機会の提供を
	理 解	・職場の理解と協力がほしい ・在学していることで仕事に全力投球していないように見る意識を変えてほしい

と答えている。

さらに、精神面では通信制であるため、モチベーション維持のための大きな要素として、仲間や大学との連帯感をどう持つかを課題としてあげている。このことは自分だけでの研究を進めることの難しさでもある。それは同じ志を持つ人との交流の必要性というところにつながる。学業の面では、研究計画をしっかり立てることや文献を読みこなすことをあげている。

職場に関することでは、仕事の量が多い、研究時間の確保が難しいと答えた者が9名中5名であった。中堅であるがゆえに、相応に責任もあり、質量共に仕事の負担が大きい時期である。家庭と職場の生活に加えて大学院生としての暮らしが加わることは、想像以上の困難が伴う。仕事と勉強との両立は、現実面の困難さに加えて、常に心理的なストレスを呼び起こすことでもある。

他には在学中の転勤の配慮をしてもらいたいという意見や、授業に出席できる勤務体制の確保を望む者もいた。転勤については、今回の調査でも9名中4名が転勤しており、うち2名については、4年間で住所を移しての転勤が各々2回行なわれている。仕事の種類や内容により、転勤はやむを得ない部分もあると思うものの、限られた在学期間であるわけだから、そのあたりの配慮がほしいという意見である。ただでさえ研究時間の確保が困難なところに、転勤はある時期また研究の足踏みを余儀なくされることになる。

その他には、勤務形態を工夫することで、学び易い環境を作ってほしい、またスクーリングに出席する際の配慮や特別休暇を認めてほしいなどの意見があった。OECD（経済協力開発機構）では、職場で有給休暇をもらって学校に帰り、新しい知識・技術を身に付けて再び職場に戻って仕事をする。これを生涯のうちに何回も繰り返すことによって、人間は成長発展するという考え方である。<sup>(5)</sup>

わが国においては、OECDのいうリカレントではなく、また、教育休暇制度には至っていない。むしろわが国の職場の実態は、「職場では仕事に没頭している方が高い評価を受ける」「社会人大学院生であることを社内で公言しづらい雰囲気をつくってほしい」（『社会人大学院生の実像発見』—1995年度調査結果）などの声に象徴されるような勤務先の無理解があり、現在でも概ね同じ状況にあり、職場の雰囲気の改善を求める声があるのが現状である。

本調査においても、精神面では、職場に対して、学んでいることに対する理解と協力を求めている。全体として職場に関しては、中堅といわれる人達がほとんどであり、控えめな意見となっている。『日本人のしつけと教育』<sup>(6)</sup>によると、「どうしても誰かが特別な利益を得れば、誰かがその分、損をするというゼロサム原理が働くので、突出への抑制が必要になる。」と述べられているように、暗黙のうちに衝突回避の知恵とも言える抑制が働いているように思う。それぞれが経費も自費負担で、スクーリング等も休暇をとって参加しているにもかかわらず、職場からは十分な理解が得られていないことなどの不満が、職場に対する厳しい批判としてではなく、意見・要望という形で現われている。大学院生であることを職場が支援してくれ、また



学んでいることの効果を認めてくれるならば、どれだけ心理的に負担が軽くなるだろうか。

職場に関連することでは、⑧の項目で修士課程を修了することで、所属する会社・団体等での評価が変わると思いますかと問いかけた。結果は

- ・評価の向上はあると思う。3名
- ・そんなに変わらないと思う 4名
- ・その他 自信につながる (定年退職者) 2名

となっている。教員における専修免許や看護教員においては副校長資格など具体的な昇進の可能性はあるものの、6名は、評価はそんなに変わらないと思うが自分自身の自信につながると述べている。これはわが国では、生涯学習の機会を作っても、評価されないという評価の実態を表している。元々、入学の目的・動機から資格型に分類できたのは3名であり、残りの者は外からの評価を第一義的には期待していない人たちである。全員が地位や評価のためというよりは、自分の働き方を考え直すことや、社会貢献を目指すなどの強い動機づけをもっている。しかしながら、通学への熱意などを含め、人は評価されてさらに成長するものであるというのは変わらない教育の原理であろう。

次に⑤大学院に求めること、「A大学院」に対して求めることや望むことについて質問した。⑨の社会人大学院はどうあるべきかで得た内容も合わせて、大学に対してと教員に対しての2つの項目に分類した。(表5参照) さらに大学に対してでは、履修、制度、設備の3項目に分類することができる。

表5 大学院にもとめること

		大学院にもとめること
大学に 対して	履 修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スクーリング科目を増やしてほしい</li> <li>・スクーリングの開催時期を増やしてほしい</li> <li>・宗教性を生かした教科内容を増やしてほしい</li> <li>・通学生と通信生をまじえたゼミナールを</li> </ul>
	制 度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日・夜間など年間通じて受講できるように</li> <li>・夜間大学院の開設</li> <li>・eラーニングの導入を</li> <li>・大学院間の単位互換を</li> <li>・教育学通信制博士課程の新設を</li> <li>・修了後も安価に聴講できるとよい</li> </ul>
	設備等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エクステンションセンターの設立</li> <li>・図書館の休日利用と遅くまでの開館</li> <li>・図書館の文献の充実</li> <li>・学生へのIT技術の推進方策を</li> </ul>
教員に 対して	日常の 指導で	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通学院生と通信院生交えてのゼミナールを</li> <li>・日常の学習支援体制が必要</li> <li>・教員と院生との情報交換</li> <li>・修了にむけてのサポート体制を</li> <li>・教員の研究分野をオープンに</li> </ul>
	修論指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・面接指導では本来の修論指導を</li> <li>・教員とメールでやり取りしたい</li> </ul>

まず大学に対しての要望のうち、履修に関しては、スクーリングの科目や機会の増を望む者が3名いた。

制度面では、休日、夜間など年間を通じて受講できるように、eラーニングの導入や夜間大学院の開設、大学院間の単位互換制度の創設などの声があった。eメールは、学生と教員とのコミュニケーション不足を補う手段ともなる。中央大学通信制大学院などでは遠隔ゼミナールや遠隔ディスカッション等の共同学習の試みが進んでいる。佛教大学でもレポートや試験の提出がSSTネットでオンラインによる提出が可能となり利便性の向上が図られている。その他、教育学の通信制博士課程の新設などを望む声があった。「A大学院」においては、通信制の教育学博士課程の新設にはまだ時間がかかるとしても、修了後も安価に聴講できるなど大学との関わりを持ちたいとの声もあった。

最後に、⑥社会人大学院生を続けるうえで励みになることという問いに対しては、表3にあるように、圧倒的に同期生あるいは院生同士の交流や情報交換等を励みにして、孤独な研究作業に立ち向かっていることがうかがえる。月一回発行の「同期生通信」や懇親会等で得られた内容も含めて大きく分けると、精神面での励まし、技術面での情報の提供及び相互交換により、モチベーションの維持あるいは学習の支援に大いに貢献している。学びは一人ではできないものではない。共に学ぶ仲間の存在は必要不可欠であり、対話する中で研究内容も深まってくるものである。「達成しようという学生の熱心な努力を奮い立たせるのは、大切な友人からの人間的支援や、その友人に対する責任感なのです」とD. W. ジョンソンらは『学生参加型の大学授業』<sup>(7)</sup>で述べている。

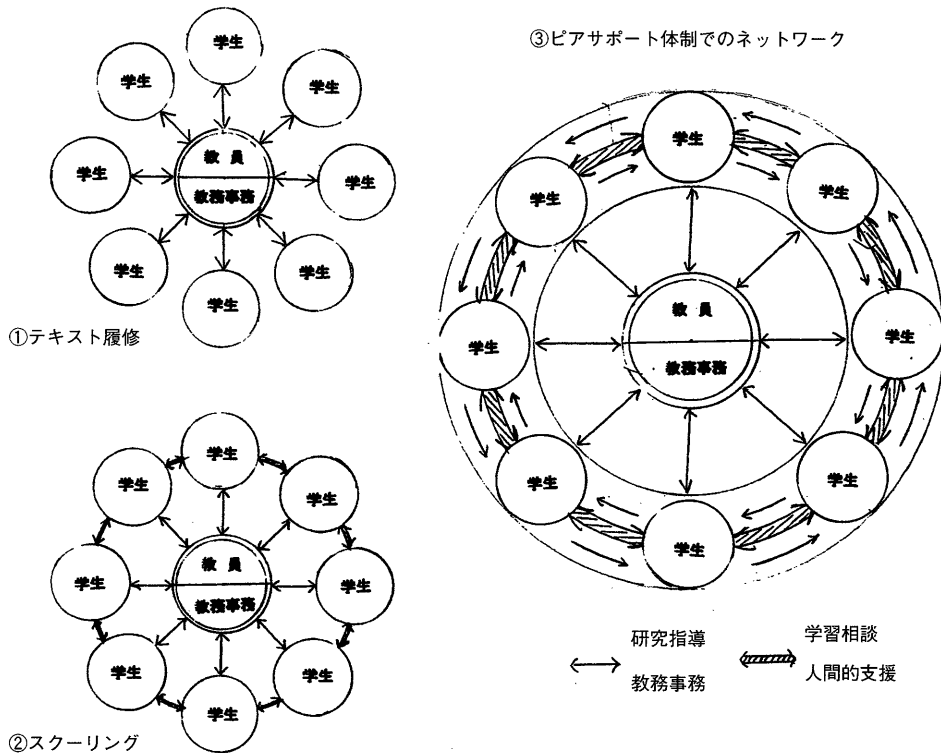
精神面では、年齢的にも仕事でも家庭でもその他諸活動でも、責任ある中堅といわれる立場にあるものが大半であり、一方、身体面でも病気等のリスクが高まる年代である。病気・転勤・被災など長い学生生活のなかでいろんな困難に遭遇した時、学生同士が近況を報告しあい、励ましあい、一時の学習の停滞から抜けだし、また目標にむけて頑張る力になっている。

具体的には、レポートや研究計画書の再提出など順調に進まない学習の過程で、それぞれの経験を情報交換し、励ましあい、資料の提供や文献の紹介など支えあうなかで連帯感を高めてきている。それは同期生の中で個々の研究テーマを公開し、共通理解の基盤があるからこそ情報が的を射たものになっているのだと考える。

技術面では、文献の探し方や紀要の入手方法、HPの利用方法などが、熟知した者から同期生全員に、情報提供されている。論文の脚注の打ち方、ページ設定などパソコンの操作技術に至るまで、経験から知り得たことが惜しみなく提供されている。一般に友人間では当たり前のことであると思われるが、住所地が全国に散在している同期生が、学ぶという共通の目的意識のもとに友好的な関係が築かれたと考えられる。それに至るには、回を重ねる親睦の場（懇親会や研修会）により親近感が増し、人柄への高感度も高まり近しい友人の関係へと発展してきたのであろう。

また修士論文の中間発表会で、教員からの厳しい語調の苦言に落ち込んだ場合、レポートが何ヶ月も返却されなかった時などの落胆や心配も、ゆとりある時間の中では、話し合うことで誤解を解き理解し合える事柄であるが、通信生にとっては時間の制約があり、学生同士の交流の中で解決されなければ、ひとりで抱え込むことになる。

これらの学生が感じた不安や疑問、不満といったことは、なかなかオフィシャルな場では語りにくい一面がある。分かり合った者同士が、同じ目的意識をもって集っている者同士の間でこそ、語り合い励ましあうことができ、また実際に心に届き効果を発揮し、強い力になっていくことが分かる。その様子は次のようになる。（図参照—筆者作成）



（図の説明）

① テキスト履修

学生と教員または教務事務との関係は、研究指導等、個別に対応されるものであり、それぞれでは完結されていく事柄ではあるが、それ以上の発展性はない。

② スクーリング

専門科目のスクーリングはゼミ形式で行われる場合が多く、教員を交えての意見交換が、通学制と同様に展開される。学生同士も同じ場を共有することにより、講義内容も深まり、親密な人間関係作りのきっかけともなる。

### ③ ピアサポート体制でのネットワーク

ピアサポート体制では、学生間の関係が、スクーリング履修時の関係に比べ、太いパイプとなり連携が強化される。学生と学生との個々のつながりだけではなく、ひとりから全体へ、全体からひとりへと、情報及び人間的支援のネットワークが構築されている。

イヴァン・イリッチは『脱学校の社会』<sup>(8)</sup>のなかで、学習に必要な資源として、「事物・規範・仲間及び年長者」をあげ、「その資源を利用可能なものにする学習のためのネットワーク」として4つのものを上げているが、その3番目に「仲間選び」(ピア・マッチング)をあげている。「一人一人の活動が特殊化されその活動のために、それぞれが仲間を捜すようなもの、ある任意の時期に同じ特殊な関心を持っている人々が出会うためのチャンスを増やすような制度」<sup>(7)</sup>の必要性を述べている。

これらを総括すると、学生が学生を支援する、相互に学びあい教えあう<ピアサポート>の重要性について気付かされる。ピアサポート制度については「Between」2005 No214で山田礼子が「アメリカの大学では、様々な場面で学生が学生を支援している。(略)ピアリーダーがオリエンテーション授業の中で、指導や助言をしている。ディスカッションのリーダー役を務めたり、レポート作成の指導をしたりする。それがピアリーダーを務める学生自身の成長につながっている」としている。

国内では、通学制の学部においてであるが、愛媛大学のホームページによると、「ピュア@カフェ」を設置し、先輩学生による何でも相談やボランティア情報の掲示を行っているとする。また名古屋大学では、学生の「困った!」の解決のための「名大ピアサポート」がある。学生同士が相談に乗り、アドバイスをし合い、支えあうという当たり前のようであり古くて新しい手法が、コミュニケーションに欠ける現代を反映する現象であるが、その教育効果が期待されている。

## Ⅲ サポート体制の必要性

### 1 「A大学院」B専攻の事例

Ⅱ章の調査の分析で、社会人大学院生を続けるうえで励みになることは、共に学ぶ同期生や仲間の励ましであると述べられていた。同様の声は、体験記や各種ホームページでもよく見かけられるが、本章では優れたピアサポートを行っている具体的なものを紹介し、サポート体制の具体例5項目を明確にするとともに、ピアサポートの必要性について考察する。

まず1点目は、入学式終了後 個人情報保護に基づく取り扱いに配慮しながらリーダーを決め、メーリングリストを作成すると共に集合写真の撮影を行い、世話人を互選し通信費(会費)を徴収したこと。

2点目は、集合写真を送る際、顔と名前が一致するように、写真に名前を付して各自に送付したこと。

3点目は、月刊の「同期生通信」(A4版)を発行したこと。平成13年4月～平成14年6月の間に計13回発行した「同期生通信」は、入学後の初期段階に人間的つながりを深める重要な役目を果たした。各自の近況を掲載した「同期生通信」が果たした役割は大きく、同期生の間に親近感が芽生え、緊密な人間関係へと発展した。

4点目は、機会をとらえて懇親会を開催したこと。大学院の行事(中間発表会・スクーリング等)が開催されるときには、その機会を逃さず懇親会を開催してきた。(H13～H17延べ15回) 会場は各自の帰宅の便を考慮し、主に新幹線のターミナル付近で開催してきた。

5点目は、研修旅行を実施したこと。1回目の研修旅行は、平成17年2月11・12日に広島で開催した。同期生9名中8名が参加し、他の期生3名が加わり、一泊二日で広島・江田島・宮島をそれぞれテーマをもって旅行した。

また、上記以外でも2～3名規模の懇親会は面接指導時等に随時行われ、各々同期生とのメールや手紙の交換により情報交換や交流が行われている。

交流の成果について、調査内容からまとめると次のようになる。

精神面では、励まし合い親しむことにより、モチベーションの維持に貢献している。通信制では孤独になりがちな履修計画の進め方や時間管理の難しさがあるが、交流の都度、刺激と励ましを受け克服への力となっている。

技術面では、研究に関して、文献の調べ方、パソコンの設定(表作成や脚注の入れ方など)、レポートの書き方、参考資料の交換・提供など具体的なノウハウが失敗談も交え情報交換され、学習の進行の助けとなっている。

## 2 サポート体制における大学院への要望

前節で事例を紹介したが、大学としても学生の自主的な活動に任せるだけでなく、学生の履修を支援するという立場から、次の点への配慮が求められるのではないだろうか。

①入学して間もない頃や、困難に直面し自信喪失した時、先輩学生からの体験に基づいたアドバイスは励みになる。オリエンテーションや中間発表会など、対面の場で意見交換できる場が必要である。②スクーリング等の対面の機会をとらえ、学生側の要望があれば、同期生のミーティングの時間と場所を提供する。③大学ホームページでの同期生の会議室、メールマガジンの活用等で情報交換を図る。人的サポートはボランティアを募るなどして行う。④修了生へのフォローアップとして、大学との関係を継続するための、修了生も参加できる新しい学習コースの開講や研究発表の場の提供を行う。

## Ⅳ 通信制大学院の今後の展望

### 1 社会人大学院のあり方

すでにⅡ章では、「A大学院」生への調査に基づき考察し、Ⅲ章ではサポート体制の必要性について検討してきたが、ここでは、社会人大学院のあり方をさぐり、さらに通信制大学院の今後を展望する。

生涯教育は自分の可能性を伸ばし自己実現できることであるのみならず、ひとが進むべき方向を模索しつつも見極め、すべての人と共に相互に学びあい教えあう中で、歴史を創造する力ともなりうるものである。

社会人が大学院で学んだことが、昇給・昇進など、社会で評価されることが期待されるが、そのためには、既存の学歴システムからの脱皮を図ることが必要である。具体的には企業等において修士の学位を自己申告させる制度や、社内選抜・国内留学選考外であっても、修了者を事後承認して費用の補助を行うなどの制度の緩和が求められる。一方、院卒というひとづくりの評価はあまりに粗雑であり、学位にのみ注目するのではなく、実際に修得した教育内容が問われるべきである。またそれは、大学院の教育内容並びに大学院生の質が問われることでもあり、評価する社会、評価される学生及び大学院双方への刺激となる。

大学院が多くの社会人を進んで受け入れることは、学生個人はもちろんのこと、当の大学院や大学教育にとっても大きな意味がある。年齢、職業、学歴などで多様な背景と属性をもつ社会人が、高い学習意欲や問題意識をもって、学生同士あるいは教員と触れ合うことで新鮮な刺激を与え合うことは、大学院にとっても静から動へと活性化の原動力となるだろう。また、企業に評価システムの改善を求めるのであるから、大学院としても学位に見合う資質・人材の養成が急務である。大学院側が責任をもって送り出した学生が確固たる社会的評価を得ていくことは、大学院にとっても重要である。

### 2 通信制大学院の今後の展望

#### (1) 通信制のメリット・デメリットについての考察

白石は「通信制は、通学の時間、修学の期間も各々の生活のペースで進めやすい。学費も通学課程に比べ低廉である。修了までの心理的不安は消えないかもしれないが、地理的、時間的、経済的制約が小さいので不安は軽減できる。・・・ただし修了率の悪さ、卒業率の悪さ、中途退学者の多さは社会人の遠隔高等教育の大きな課題として残る」<sup>(10)</sup>と課題をあげている。この点に関して、本論では通信制のマイナス面を補完するものとして、サポート（学生同士の助け合いや大学院とのパイプ）体制の必要性をあげ、サポートが強くなければ学生が修了に至らず、途中退学していく可能性は高くなると考える。様々な場面での学生同士の援助活動＜ピアサポート＞の大きな効果というものを本調査から明らかにすることができる。

物理的あるいは心理的に他の学生の近くにおいて、他の学生を助けること、他の学生と学習内容を共有すること、これらは学生同士の励ましあいを生む。また社会的技能ともいえるリーダーシップや信頼形成、コミュニケーション能力の養成にも役立つ。これはインターネット等の普及に伴い、今改めて求められている学力観ともいえるものであり、青年層ならずとも現代を生きる者への共通の時代的要請といえるものではないかと考える。何よりサポート体制を進めるためのネットワーク作りが重要な要素となる。

通信制大学院にあっては、サポート体制により通信制のマイナス面を補完し、最終的に質の高い学生を養成し、かつ修了率を上げる努力が求められる。

また、昨今のインターネットの普及により、大学との事務的な連絡や教員から受ける研究指導は非常に便利になった。学生側からは更なるeメールの利用拡大を望む声がある反面、本調査でもわかるとおり、対面式授業（スクーリング）への期待も大きい。「同期生通信」にも「対面してうける講義は、身体全体に刺激を与える」と述べられている。

2002年2月の中教審答申では、各大学院による指導教員と学生との接触機会をより多く確保するための努力について「学習過程において、学生間で意見交換や情報交換等の交流を行うことは、相互に刺激を与え合い、研究活動にも好ましい影響をもたらし得る」と述べられている。これらは通信制を考えていくうえで重要な課題であると思われる。特に通信制にあって、入学を志した者が研究目標を達成し、ドロップアウトすることなく修了に至るための方策を検討することは、学生にとっても大学院側にとっても重要である。解決に向けての作業は、生涯学習社会の発展への阻害要因の解決策となるであろう。

## （2）通信制大学院におけるコミュニケーションの方法について

通信制大学院におけるコミュニケーションの方法については、インターネット等のマルチメディアの利用が急速に進む中、様々な意見がある。大きく分けると3つの立場に分類することができる。

1つ目は、従来の通信制の授業を補完するものとして、IT等を利用した遠隔教育を活用しようという立場がある。

学生が自宅で自学自習するテキスト履修においても、情報機器を活用することにより、教員と学生との双方向のコミュニケーションを援助することが、学習へのモチベーションを高めることになる。これについては「学生が求める授業とは、双方向のコミュニケーションが可能であり、授業に参加している意識を高めることができるものである。」<sup>(11)</sup>との高橋らの報告がある。

2つ目は、対面式授業のマイナス面を改善するものとして、通信制あるいはIT利用の遠隔教育に期待する立場である。「対面の集合学習では師弟間や学生間の社会的身分が反映され、学習者は自由な言動を差し控え、対人的緊張感も生まれやすい。」と白石<sup>(10)</sup>は述べている。人間関係とは、それぞれの関係性の中で周囲の状況を見ながら自分の立ち位置を補正しつつ、構築さ

れていくものである。しかし、そのことにより自由な学習活動が阻害される場合は問題である。そのため「閉ざされた研究室から公開されたネットワークへ変えていくこと」<sup>(12)</sup>の必要性を加茂は述べている。

3つ目はマルチメディア利用の遠隔教育をもってしても、対面式授業を補完し得ないという立場である。「デジタルメディアを駆使しても、暗黙知をすべて反映することは出来ない。」<sup>(10)</sup>「自己実現、自分探し、仲間作りは通学するプロセスが大事であって、通信制が彼らの何かを満たすことができるかという、私は懐疑的になる」<sup>(12)</sup>とする意見もある。確かに直接経験に及ばないことは多くあるが、この限界を見据えることが重要であり、そのうえでその補完を何に求め何が有効となるかが、今問われていることである。

以上が、3つの立場であるが、見方や立場が変われば評価は相反するものでもある。対面式授業の有効性を認め、一層の利便性を高めるために、遠隔教育を補完的に導入するという立場があり、一方、その対面式にも、閉鎖的な人間関係が生じた場合、弊害もあるとする立場がある。さらに対面式でしか獲得できないものがあるとする立場がある。

これからは対面式授業と遠隔教育双方のメリット、デメリットを理解したうえで、両立できる方策を考えていくことが現実的であろう。各大学・大学院が、特色をもった教育内容及びそれにふさわしい授業形態を提供することで、利用する側は、数ある選択肢の中から自分の条件により近いものを選ぶことができればよい。総じていえることは、マルチメディアの進展により、通学制と通信制の明らかな境界はなくなりつつあるといえることである。

### （3）通信制大学院の今後の課題

加茂<sup>(12)</sup>は「通信制の独自性が重要である」として次の三つをあげている。要約すると、①公開のネットワークへ②教育用材の開発③通学制と通信制の両方のメリットを享受するための方法、つまり、全国の拠点都市に平日、土日に通える大学院（サテライト）でゼミナール等を、その他の授業は通信制で、と述べている。

「A大学院」B専攻の場合、カリキュラムの内容に、より実践的なものを加え、また、宗教性を生かした「A大学院」独自のカリキュラムも望まれるが、これらはスクーリングによる対面授業がふさわしいと考えられる。一方、最新の情報や知識の伝達は、テキスト履修等に加え、オーダーメイド型のオンライン学習など多様な方法が考えられてよい。

修士論文の指導においても、eメールの活用を併用することにより、対面して行う論文指導の効率を高めることになれば、時間の制約の多い社会人にとっては喜ばしいことである。本調査でもサテライトキャンパスを望む声があったが、「A大学院」の場合、全国で行われる学部の科目最終試験会場の機会をとらえ、大学院のスクーリングを開催することも可能であると考ええる。



## 終わりに

平日における勤務終業後の通学の困難さ、地理的な困難さ、経済的な困難さ、閉ざされた人間関係からの忌避など通信制の学びを選択している様々な理由がある。種々の制約の中にあつて社会人が、仕事のかたわら学ぼうとする強い志がある。社会人であることにより、入学の段階から困難な課題を抱え、年齢的にも若いとはいえず、また転勤や自分自身や家族の病気など職場や家庭における状況の変化の著しい年代である。今回の調査でも実際に、様々な困難に直面する事例があつたが、通信制であるために学び続けることが可能であつた。このことは、いつでも、どこでも、だれでもが、学び続けられる場として、生涯学習社会における大学院の理想を実現したものであると考えられる。

これからは、働くことと学ぶことを分離せず、働くなかで学び、学びのうえで働き、その中で仕事を深め、また新たな発想で人生を見つめていく時代になっている。それが真の意味での「学習社会」である。さらに高齢者にとっても、自分の進歩に合わせた学習を生涯にわたり継続していくこと、その生涯学習をもってこそ、長い人生を豊かに過ごしていくことが可能になるのである。<sup>(9)</sup>

今回の調査でも、仕事と学業の両立は、時間的にも物理的にもかなりの負担であることが判明しているが、修了までの年限の緩和が必要であろう。2年あるいは3年と決めるのではなく、単位制というべき履修形態も可能だと考える。

また、何より通信制大学院生を励まし支えるのは、＜ピアサポートの力＞（共に学ぶ仲間の励ましや助け合い）である。志をもって通信制大学院に入学した者が、時間の制約など様々な困難に遭遇する中で、学習相談を含め人間的支援に支えられ、継続・達成にむけて励む力を獲得していくのは、ピアサポートによる援助活動である。ピアサポートにより学生同士が精神的絆を強め揺り動かし、モチベーションを維持しさらに高めていく。学生自らが＜ピアサポート体制＞を構築することはもちろんのことであるが、今後、大学院側も＜ピアサポート体制＞の具体的な方策を立てるとともに、組織的な運営や大学院修了後の継続して行う研究機会と場所の提供も必要である。これらは生涯学習社会の構築と発展のために寄与することになるだろう。

本論では、調査対象を限定された入学年の9名により分析したが、様々な属性を持つ9名であり、通信制大学院生のピアサポートの効果を解明したこの論考は、大学院修了に至るための方策を考える一つの提言となると考える。

### 〔注〕

- (1) 文部科学省『学校基本調査』2006年版
- (2) 山田礼子『社会人大学院で何を学ぶか』岩波書店、2002年、pp.5-6

- (3) 山田礼子「大学院改革の動向」『教育学研究』第70巻第2号、2003年6月、p.16
- (4) 西岡正子「人間と加齢」竹内義彰編『教育と福祉の統合』ミネルヴァ書房、1987年、p.165
- (5) 瀬沼克彰『日本型生涯学習の特徴と振興策』学文社、2001年、p.23
- (6) 東 洋『日本人のしつけと教育』東京大学出版会、2002年、p.10
- (7) D.W.ジョンソン・R.T.ジョンソン・K.A.スミス 関田一彦 監訳『学生参加型の大学授業』玉川大学出版部、2001年、p.34
- (8) イヴァン・イリッチ、東 洋、小澤周三訳『脱学校の社会』東京創元社、2002年、p.142  
pp.168-169 (初版1977年)
- (9) 西岡正子「人間と加齢」竹内義彰編『教育と福祉の統合』ミネルヴァ書房、1987年、p.174
- (10) 白石克己「遠隔高等教育の原理と教材開発の課題」佛教大学総合研究所紀要第11号、2004年3月
- (11) 高橋一夫・原清治「情報機器を利用した大学における双方向授業のあり方」佛教大学教育学部学会紀要第2号、2003年
- (12) 加茂英司「通信制大学院とインターネットの活用」村田治編『生涯学習時代における大学の戦略』ナカニシヤ出版、1999年、pp.80-81

(うの きぬこ 佛教大学研究員)

(指導：西岡 正子 教授)

2007年10月6日受理